凡例

一、本書は大學一般教養學科及び高等學校國語科の教科書として、萬葉集から抄出したものであります。

一、抄出にあたっては、一面的に偏らず種々の性質及び傾向のものを採るように心がけました。量の關係で割愛したものもありますが、代表的なものはかなり多く收め得たと思います。

一、原典の書記法を知らせる爲、少數ながら原文で出しておきました。

一、研究問題は着眼の例を示したものでありますから、なお各方面から研究されるよう望みます。

一、挿繪・圖版の類は凡て武藏野書院前田信氏の努力に係るものであります。厚く謝意を表する次第であります。

昭和二十六年一月

編者

目次

はしがき……二
卷第一……五
卷第二……九
卷第三……一二
卷第四……一七
卷第五……一八
卷第六……二四
卷第七……二八
卷第八……二九
卷第九……三二
卷第十……三七
卷第十一……三九
卷第十二……三九
卷第十三……四〇
卷第十四……四一
卷第十五……四二
卷第十六……四三
卷第十七……四六
卷第十八……四八
卷第十九……四八
卷第二十……五〇

—目次終—

萬葉集 抄 新註選

武藏野書院

（一）相聞・挽歌と共に万葉集の三大部類の一。相聞・挽歌以外のいろいろの歌を集めたもので、行幸・遊宴・旅その他の歌が含まれている。
（二）奈良縣高市郡飛鳥村大字雷、奥山の辺。
（三）舒明天皇。
（四）奈良縣磯城郡香久山村。大和三山の一で神聖な山として尊ばれた。
（五）「とり」は接頭語。「よろふ」は具備する意。
（六）埴安の池。もと香具山の麓にあった。今はない。
（七）怜は憐と同じ。「怜む可し」の意味で可怜と書いたのが、可に扁がついて、本文のように書くようになった。「うまし」は賞美の意。古語では「うましき」でなく「うまし」で連体形に使えた。
（八）大和の枕詞。
（九）高市岡本宮と同じ所。
（一〇）齊明天皇。
（一一）鏡王の女。キトツは清音であったかも知れない。愛媛縣溫泉郡和氣村堀江村のあたり。
（一二）自分の動作に関する希望をあらわす助詞。
（一三）天智天皇。
（一四）「の」の下に細字で「近江宮御宇天皇」とある。
（一五）香具山・耳梨山・畝火山のこと。この三つの山の間の愛の争いのことが、略した長歌及び反歌によまれている。
（一六）ワタツミは海神をいう語。轉じて海のことを言った。
（一七）豊は美称。旗は長くたなびいた雲。
（一八）古寫本の「彌之」により「見し」とする説がある。
（一九）月。
（二〇）コソを希望の助詞とするか、係助詞とするかについて意見がわかれ、その各々の立場からいろいろな訓が試みられている。アキラケクコソ、スミアカリコソ、サヤケカリコソなど。原文は清明己曾。
（二一）天津市の滋賀里、南滋賀又は錦織の辺。
（二二）天智天皇。
（二三）藤原鎌足。大織冠。天智天皇の八年十月薨。
（二四）年五十六。

巻第一

雜歌

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇

天皇香具山に登りて望國し給ひし時御製の歌

2 大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　國見をすれば　國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　怜し國ぞ　蜻島　大和の國は

後岡本宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇

額田王の歌

8 熟田津爾　船乘世武登　月待者　潮毛可奈比沼　今者許藝乞　菜

中大兄の三山の歌一首（長歌及び反歌一首略）

15 渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜まさやかにこそ

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇内大臣藤原朝臣に詔して春山の萬花の艶秋山の千葉の彩を競はしめ給ひし時、額田王歌を以て判れる歌

（一）次の句にかかる枕詞。
（二）「さる」は「行く」にも「來る」にもつかう、進行移動を示す語。
（三）井戸王の傳記はわからない。この時の作歌は脱落したとする説と一九の歌がそれだとする説とある。
（四）みわ（神酒の古語）の枕詞。
（五）奈良縣磯城郡三輪町。
（六）奈良の枕詞。
（七）奈良市の北方の山で、大和から山城への通路になっている。近江えゆくにはここをとおった。
（八）山の間。
（九）下の「い」積るまでに」の「い」と同じく接頭語。
（一〇）「つつ」は見ることの丁寧に反覆されることをあらわす。
（一一）視線を遠く放つこと。
（一二）「隠す」という動詞に継続を示す助動詞「ふ」がついたもの。
（一三）滋賀縣沛生郡の野。現在、武佐・老蘇・市辺三村のあたりに、内野・蒲生野・野口などの地名があるが、その辺か。もっと東の方だとの説もある。
（一四）この時の獵は薬獵で、薬用の鳥に、鹿の袋角や薬草をとった。
（一五）紫の枕詞。あかねは茜科の宿根蔓草本、根に黄赤色の色素を含み、染料となる。根はまた薬用にもなる。
（一六）紫草の生えている野。紫草は、紫草科の宿根草。根は紫色の染料となり又薬用にも供せられる。
（一七）シメは占有を示す標木など。ここは天皇の御料の野でみだりに人を入らしめぬ意。
（一八）ヒツギノミコ。ここでは後の天武天皇。
（一九）明日香清御原宮。天武天皇の宮地。奈良縣高市郡飛鳥村雷附近。
（二〇）「にほふ」は色の美しくはえること。

16 冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　開かざりし　花も開けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の木の葉を見ては　黄葉をば　取りてぞ賞ぶ　青きをば　置きてぞ歎く　そこし恨めし　秋山吾は

額田王近江の國に下りし時作れる歌、井戸王即ち和ふる歌

17 味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積るまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや

反歌

18 三輪山を然も隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや

天皇蒲生野に遊獵し給ひし時額田王の作れる歌

20 茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

21 皇太子の答へませる御歌　明日香の宮に御宇しし天皇

紫草のにほへる妹を憎くあらば人嬬ゆゑに吾戀ひめやも

紀に曰はく、天皇の七年丁卯の夏五月五日蒲生に縱獵し給ふ。時に大皇弟、諸王、内臣及び群臣、皆悉に從せりといへり。